



●——入寂10日前のラマナ・マハルシ

あとがき

「私は誰か」という究極の問いを私たちの世紀に提出した、南インドの沈黙の神人、ラマナ・マハルシの言葉を、ここに訳出してお届けすることになった。このような仕事を恵まれたことを、まず第一に天地に深く感謝している。

幸いなことに、昨今、インドという思想風土は、単に仏陀が法を説かれた天竺^{てんじく}国であることや、ウパニシャッド哲学が生まれた国であるにとどまらず、また、ノーベル賞詩人のタゴールや非暴力独立運動を指導した聖ガンジーの国であるにとどまらず、多くの現代人である私たちに精神的な衝撃を与える、まさに現代的な思想風土として親しまれ、熱望され敬愛されはじめているかのように見える。もっと親しまれ、もっと熱望され、敬愛されてよいと私は思っている。

私を知るかぎり、インドには一九世紀から今世紀にかけて相ついで二人の神人が出現した。その一人はラーマクリシュナ(一八三六～一八八六)であり、もう一人がここに訳出したラマナ・マハルシである。

ラマナ・マハルシは一八七九年に、セイロン島にほど近い南インドのティルチュジューという村で生まれた人である。五十キロほど離れたところにマドゥライというかなり大きな都市がある。マドゥライには、インドでも最大規模の寺院のひとつがあるというから、信仰の盛んな都市であろう。

ティルチュジューの村からマドゥライのハイスクールに進み、レスリングやボクシングや水泳が大好きな少年だったラマナに、あるとき、不意打ちのように突然死の恐怖が襲ってきた。死の恐怖は彼を大変に苦しめた。しかし彼はその恐怖を正面から見つめ、床に体を伸ばし、自ら想像上の死に入り、呼吸すらも止めて死を体験した。その体験の中で彼は、死ぬものは自分の肉体であり、自分の自己は死ぬはずのものではないことを知った。十七歳のラマナは引きつづき仮死状態にありつつ、サマーディに入り、その中で自分の真の源泉である自己、ヒンドゥー民族がアートマンと呼ぶものに融合したもののようである。これがただ一日で起こったことなのか、数日あるいは数週間の内に起こったことなのかは定かでないが、この体験をとおしてラマナは以前とはすっかり違った少年になってしまった。まもなく彼は、「私は、私の父を尋ねて、彼の命令に従ってここから出発しました。これはただ、高潔な仕事への船出にすぎません。ですから、誰もこのことを悲しむ必要はありません。この計画にはお金は要りません」という書き置きを

残して、学校の寄宿舎を出、そのままティルヴァンナマライの寺院に向かった。

アルナーチャラという聖なる山のふもとのこの寺院で、ラマナは三年間誰とも口をきかず、ある神官の好意で食物を施してもらいつつ、サマーディに入りっぱなしの状態を過ごした。その後アルナーチャラ山に登り、山中の洞窟を住みかとして、ときに食を乞いに町に降りる他は、もっぱら瞑想とサマーディの日々を送った。しかしあるときから、町に住む老婦人が自分で食物を山中まで運んでくるようになった。この頃から若いラマナに一人の弟子ができ、ともに暮らすことになる。沈黙は自然にとけ、少しは話をするようにもなった。なお数年間この洞窟に住み、ラマナが自己の霊の最深部にしっかりと定住しうるようになった頃、ガナパティ・シャストリという有名な学者がラマナを訪ねてきた。シャストリは学問だけでなく霊の道を真剣に尋ねている修行者でもあったので、ラマナに出会ってたちまち帰依した。シャストリはヴェロアという自分の町に一団の彼自身の信者を持っていたが、そこに帰って、自分はアルナーチャラでマハルシ、つまり大いなる賢者に出会ったと告げた。このときからラマナは、マハルシと呼ばれるようになった。独居の時期は終わりつつあった。ラマナ・マハルシに従う人が少しずつふえはじめた。住居が、山の低い尾根に作られた草庵に移された。さらにまた何年かして、マハルシを訪う人々が多くなってくると、アルナーチャラ山の山麓に大きな瞑想場

ができ、彼はそこに住むようになった。

ラマナ・マハルシの教えの中で、最も特徴的なものは「沈黙」である。本書の中にも「沈黙」はひとつの本質的なテーマとして提出されている。実際にラマナ・マハルシを訪ね、その最初の西洋人の弟子となったポール・ブラントンの記述によれば、マハルシの瞑想場では終日、針一本落ちる音でも聞こえるほどの静寂が支配していたそうである。マハルシの本質は「沈黙」にあり、言葉にはない。訪れる人が問うやむにやまれぬ質問に対して、わずかなガイドダンスとして出てきた言葉が、記録されてこのように残されたにすぎない。本書を読まれる方は、ここに記されている言葉はまことに氷山の一角であり、真理は「沈黙」の奥にあることに心していただきたいと思う。

ラマナ・マハルシにあってもうひとつの特徴は、彼が「知」の人であったことである。思弁ではない、血潮の流れる「知」を、ヒンドゥーではジュニャーナと呼ぶが、マハルシこそそのジュニャーナの人であり、「知」の人を呼ぶもうひとつの呼称リシ(賢者)の名にふさわしい人であった。最初に紹介したもう一人の神人ラーマクリシュナが、愛(バクテイ)の人であったことと対比すると、興味は深く尽きない。一人の人は「愛」によって神と合一し、一人の人は「知」によって神と合一したのである。「知」は知性ではない。まして知識ではない。知性と知識と知恵の奥にひそむ根本的なあるもの

をジュニャーナ、すなわち「知」と呼ぶ。

インドが日本の若い人々の興味を引くようになって以来、それはさまざまな形で紹介されてきた。とくにバグワン・シュリ・ラジニーシが一連の書物をとおして解き明かしてきた、インド的な悟りの風景は、この時代へ新しい息吹きを与えてくれるものであった。シュリ・オーロビンダの、思弁的な匂いはするもの、オーロビンダ市というひとつの理想都市を作り上げるまでに到った哲学的営為、クリシュナムルティの、神という言葉を極力避けつつそれに至ろうとする純哲学的営為、あるいはまた、裸足の聖者として知られている初代のシルディ(西インドの小都市)のサチャ・サイババ。インド的なものを支えている、これらの人々の思想や言葉に、現在の私たちは比較的容易に接することができるようになった。

今ようやく、ラマナ・マハルシ、この最もインド人らしいインド人の魂が日本の魂にも知られる時が来たのだと思う。私の手もとにある英文の別の本の中に二十一歳のラマナ・マハルシの写真がのっている。岩を背にしてふんどしを一本しめているだけで、他には何も持っていない写真である(本書所収の「私は誰か」の問答はこの頃行なわれたと言われている。三八ページの写真がそれである)。また同じ本の中に、別のもう一枚の写真がのっている。マハルシが入寂する十日前に撮影されたものというコメントが附してある

が、ベッドにもたれかかってはいるものの、やはりふんどし一本をしめているだけである(二〇二ページ写真)。マハルシの入寂は一九五〇年の四月で、それほど遠いことではない。その生涯をふんどし一本で過ごしたことに、訳者は深い興味を持つ。

訳者は、この十数年来、ラマナ・マハルシの一枚の写真を掲げ仰いできたものである。マハルシ自身は「私はこの肉体ではない」と言われているにもかかわらず、その愚を私は止めることはできない。

やはり十数年前、ティルヴァナンマライのアルナーチャラのアシユラムに滞在したことがあり、現在は鹿児島県の吐噶喇列島の諏訪之瀬島で漁師をしている長沢哲夫が、私が本書を訳出していることを知って次のような題名のない詩を送ってくれた。

アルナチャラ

ラーマナアシユラムの瞑想室

ラーマナの前に坐る

一つの言葉がくり返される

“私とは……?”

アシユラムの食堂

南インド風の豊かな食事

バターミルクをすすりながら

一つの言葉がくり返される

“私とは……?”

アルナチャラをまわる田舎みち

アルナチャラをながめ

アルナチャラと口ずさみ

アルナチャラを想い

アルナチャラに礼し

歩きながら

一つの言葉がくり返される

“私とは……?”

雲一つない青空が

はてしなく広がる平らな大地と接するところに
陽がかたむきはじめ

みるみるうちに赤くそまっけていくのを
アルナチャラの小さな岩に腰をおろし
ながめる

アルナチャラ 火の丘

アシラムにもどり

ラーマナの姿の前に坐る

“私とは……”

ラーマナが暮らし 息をひきとった小さな小屋

まわりの静けさよりも静かにたたずむ

ラーマナのほほ笑みの輝き

アルナチャラ

目に見えないさまざまな光りがたむろしている

アルナチャラ 限りなくまばゆい光り

人がうまれ そこに死んでいく

世界がうまれ そこに消えていく

アルナチャラ 光り

心のむくそこに消えることなく輝き続ける

“私とは……”

とさぐる心のおくそこに

アルナチャラ

アルナチャラ

アルナチャラ ラーマナ

この詩を読みつつ、私は胸にあふれるものを感じる。

私はまだアルナーチャラを訪れる幸運に恵まれていないが、長沢^{ナリガ}が訪れてくれたこと
で今はそれを肯^よしとしている。

なお本書は、アメリカのシャンバラ社から出版された The Spiritual Teaching of Ramana

Maharshi の翻訳である。似た題名の本に、アーサー・オズボーンの編になる The Teachings of Bhagavan Sri Ramana Maharshi in His Own Words があり、師と弟子の問答集である点も同じであるが、別の本である。こちらもしずれ訳出したいと願っている。

終わりに、写真提供その他お力添えいただいた山田孝男さん、橋本創造さんに心からお礼申し上げます。また、本書の発行を企画してくださった、めるくまーる社社長の和田禎男さん、編集部和田穹男さん、片向佳津子さんに謝意を表するとともに、この小さな出版社が日本の出版文化の新しく清らかな一翼を荷っていることをありがたく思っております。装幀を引き受けてくださった中山銀士さんとは、今回で二度目の共働である。ともに一つの別々の道を歩きつつ、三度目、四度目と共働できたら、と願っています。

一九八二年九月一九日

屋久島にて 山尾三省



குளநாத் தீர்த்தாபம் துள்ளு பெருமா
நல்ல வடியார்மே
புளநாத் தீர்த்தா தீர்க்கு மருவ
முன்னமப் பொருள்பெறு
மேளந் தீர்த்தா புளநாத் கரடி
கிழிய மிரலினந்
நாளைத் தீர்த்தவந் தீர்த்துந் தார
லனா னறு மலையாரே.

●——アルナーチャラ寺院

アルナーチャラの丘の上を
小さな鹿や熊や
豚たちが歩きまわる
大きな象も歩きまわるが
すべて
平和である
ここには主アルナーチャラが
アンナマライの御名によって
浄められた
至高の知識として在り
やってくるものたちの
無知をぬぐい去る
主の恵みに洩れるものは
誰もいない
●——ラマナ師自筆による
アルナーチャラ山讃歌

